

看護者の観察力獲得を目指した学習コンテンツの開発

齊藤リカ*1・賀来亨*1・高田麻依子*2

Email: r_saito@nihoniryo-c.ac.jp

*1: 日本医療大学保健医療学部看護学科

*2: 札幌中央病院品質管理課

◎Key Words 看護者, 看護学生, 観察

1. はじめに

近代看護学の始祖であるナイチンゲールは、病人の観察を最も重要な実践的知識と位置づけ、観察方法を看護者に教えるよう説いている⁽¹⁾。しかし、医療従事者が観察を怠ったために発生する医療事故は後を経たない。現在、我が国は超高齢社会となり、病状が多様で重篤化しやすい高齢患者も増加の一途である。これに対する看護ケアや介護の場面では、必然的に質の高い観察力が求められている。

しかしながら、看護者に対する観察力獲得のための効果的な学習コンテンツが数多くあるわけではない。観察力の重要性は説かれている一方で、実行性ある学習コンテンツが開発され妥当性を検証されたものが求められている。そこで本研究は、看護者の観察力獲得を目指した学習コンテンツを開発する一助として、試験的に視覚情報に特化した観察力向上のプログラムを実施し運用の可能性を探索することを目的とした。

2. 従来の観察力獲得を意図した教育

2.1 義務教育課程

小学校や中学校における理科教育において観察は重要な役割をもつ。自然科学における法則や摂理について、観察を通して学ぶことになる。具体的には、メダカの観察や朝顔やひまわりを育てながらの観察、地層を観察しスケッチする学習コンテンツ等が有名であろう。見て記憶し、あるいは見ながらスケッチをすることで観察したものをあるがままに表現し、その事象や現象に対する理解力や判断力が養われている。近代になると理科学習においても ITC 活用により効果的な理科学習における観察力獲得の試みが実践されてきている。

2.2 看護学専門教育課程

看護学の専門教育課程においても観察力獲得は非常に重要な役割をもつ。看護学に関する専門教育の中でも導入部分にあたる基礎看護学技術に関して、第一に強調されることは看護者の観察力の重要性である。看護の対象である人間と対峙するとき、すべては観察から始まる。観察の重要性は説くものの、観察力を獲得するための学習コンテンツが用意されているケースは多くはない。多くは、実践的に患者の体温や脈拍を測定する診療に係る技術を練習しながら、観察すべきポイントを意識していくプログラムが一般的であろう。

2.3 従来の観察力獲得を意図した教育の問題点

これまでの看護学専門教育課程では、義務教育課程ですでに観察力獲得のための手段を既修得事項として取り扱ってきた。このため、看護学の教育においては改めて観察について取り上げ、トレーニングし、その能力を強化すると仕組みが積極的に実施されなかった背景がある。しかし、看護者が身に付けるべき観察力は、患者の生命の安全を保障し、安楽な生活をマネジメントする上で全ての看護ケアの礎であり、高い専門性が求められている。以上より、看護学専門教育課程においては、専門性を反映した観察力獲得のための学習コンテンツが必要であると言える。

3. 観察力獲得を意図した教育実践の概要

3.1 対象

看護系大学に所属する看護学生で、看護学に関する基礎的学修段階を終えた者を対象とした。

なお本教育実践は、視覚による観察を主とすることから対象となる看護学生は視認性に問題ない者とした。

3.2 実践方法

開始前に本実践については、成績・評価には一切関係ないことを説明し実施した。

実践に先立ち、看護における観察についての講義を行った(図1)。

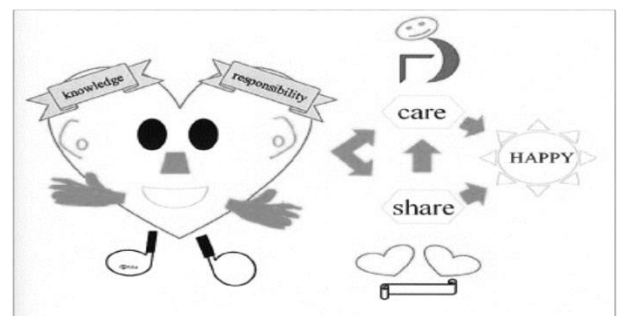


図1 看護における観察の概念

3.3 実践方法

本実践は、観察力のなかでも視覚情報に注目し映像情報を教室のモニター上に提示し、対象者にその観察内容

について色鉛筆を用いてA4用紙に描画させた。本実践での学習コンテンツに用いた画像は、3つの段階を用意した。

①まず始めに三角形と円形を組み合わせた2次元の単純画像を提示した。

②次に3次元画像として対象者になじみのあるリンゴ等の果物を提示した。

③そして、高齢の患者の顔面写真、同患者が療養環境にいるときの全身写真を提示した。

これは、段階ごとに観察情報が増えるよう意図的に順番を設定したものである。

画像の提示時間は1分間とし、描画時間は5分間とした。画像提示中および描画中は学生個々の観察力評価のため学生同士での相談や私語は慎むよう注意喚起した。

4. 結果・考察

本実践は、観察の中でも特に視覚情報に特化した学習コンテンツであった。

4.1 観察による描画の特徴

用意した3段階の画像のうち、1段階目の図形に関してはほぼ全員が正確に観察し描画することができていた。しかし、2段階目、3段階目となると観察不足による描出不足と誤認によって実際とは異なる描出をするなど課題があった。これは、単純な図形では必要としない観察行為として、複雑な情報となったこと、情報量が増えたこと、更に能動的に観察ポイントを意識しながら視覚情報を取得することが関係していると考えられる。つまり看護学生の段階では、看護者として患者を観察するとき、観察し情報として取得すべき量と質に課題があることを示している。看護学生には観察力獲得のための教育トレーニングが必要である可能性が捉えられた。

4.2 観察による描画に対する感想

参加した学生からは、観察しているつもりであったのに描画しようとすると思いつけず十分な観察ができていなかったという意見が多く聞かれていた。看護者の観察は、対象を漠然と眺めるのではなく、情報収集としてケアを必要とするポイントを見極め判断するプロセスを経る。今回用意した患者の画像は高齢者であった。高齢者の外的特徴を捉え、加齢による影響や安全を保障する環境であるかは、意図的かつ能動的な観察によって初めて可能となる。自分の描画する絵を見つめ確認することで、自分の観察力を自覚することになり、看護ケアに活かすことができる実践的な観察力獲得に繋がると考えられる。

5. 本実践の限界と課題

対象者は、視認性に問題ない看護学生であり、実施に際しては両眼で上体運動・眼球運動に制限は与えず、通常の講義が行われる教室のモニターを利用して実施した。ヒトの視野の正常は、一般的に片眼で視線を固定した状態で上方60度、下方70度、外側100度、内側60度といわれている⁽²⁾。通常、講義に使用されている教室では視界は十分確保されるものの、モニターまでの距離が一定ではないため、座席によっては視野確保において差が生じていた可能性がある。今後はタブレット型PC

を用いて机上で観察画像を提示するなど、改善していく必要がある。

本実践は観察し、その内容を描画することによって観察力を評価している。そのため対象学生の描画に対する新密度によっては評価に影響を与えている可能性が否定できない。今日、スマートフォンの普及によって個人が写真撮影を行う機会が格段に増加した。自分自身の目の前にある現象を記憶に留めなくとも写真が代用することができる時代である。しかし、医療や福祉の現場では、プライバシーへの配慮のために撮影できない場面や、一瞬の出来事をも記憶しておく必要がある場面も多い。今後は個人の描画能力を考慮しながら、描画を用いた観察力獲得の学習コンテンツの妥当性を検討していく必要がある。

6. おわりに

観察とは、観察者の五感を用いた能動的な情報収集とその情報に対する認知情報処理を経て表現される活動と表現することが可能であろう。本学においては入学時より、形態機能学などのカリキュラムにおいて描画を取り入れ、学生が観察し、その内容をありのまま表現するトレーニングを実施している(図2)。本実践と合わせ学生には観察の重要性は理解が深まってきているものと考えられる。この観察力獲得のための教育指導は、一方的な知識の伝達では練磨することが難しい。今後も引き続き観察力獲得を着実に身につける教育方法の実践開発を継続する必要がある。

また教育においてITC活用が盛んである。看護者の観察力獲得を目指した学習コンテンツにもITCを導入し、より効果的で迅速な観察ができるよう検討していく必要がある。



図2 体育館において等身大の人体図を描画する場面

参考文献

- (1) Nightingale, F.: "Note on nursing: what it is and what it is not.", 現代社 (1860/1995).
- (2) 池田恒彦他: "視野", 現代の眼科学(9th ed.), pp31-36 (2006).